

◎一日目「西表島へむけ出発 ・ ナイトツアー」

鹿児島空港での check-in トラブル（空港側の不手際）でバタバタと出発した最初のフライト。これまで吉野で顔を合わせていた子たちも、意外とそこまで相手を知らなかったり、初参加や久しぶりの子も含まれていたこともあり、離陸してしばらくは、硬い雰囲気の内機内。飛行機に慣れている子もうっかりシートベルトをし忘れていたり、CA にジュースを頼むのもしどろもどろで、おかわりを頼み損ねた子もちらほら。とはいえ、いつもなら甘えられる両親もおらず、スタッフも離れたところに…。結局頼りになるのは、隣の席の友だちだけ。自然と頼らざるを得ないし、できる子がフォローしていく。おかわりをもらえなかった子は、友だちの力を借りて次の機会にゲット。前の列の子たちが成功したのをみて、自分たちも勇気を出して行動し…と、狭い機内でもいい連鎖が生まれ始める。那覇空港到着の頃には、すでに隣の子と意気投合し、趣味の話や学校の話で盛り上がっている子もいた。どの子もこれから始まるツアーに、期待と緊張が入り混じっていた 1 本目のフライトだった。

おやつは、すでに初日から 1 日分ずつ配給制。子供たちが好みそうなスナックやせんべい、キャンディ、ラムネ、ゼリー等を、1 人分/1 日分ずつ小袋にいれ、初日は搭乗直前に手渡した。食事に影響が出ないように、タイミングや量を自分で判断して食べることになるし、全部食べてしまえば、夕方まで食べるものもなくなってしまふ。移動日の初日は、乗り物酔いなども考えに入れておかなければならない。すべて自己管理、自己責任。自分の胃袋や体調と常に会話することを意識してもらうことがこの 1 週間とても大切だ。これまでの経験や習慣から、初回からマナーを守り、場をわきまえ「考えて」食べていた。ゴミの管理も完ぺきだった。

那覇空港では、乗り換え時間が 70 分。本来なら十分だが、鹿児島空港でのトラブル経験もあり、みな緊張感をもってきびきびと移動した。1 階の到着ロビーで一度荷物を受け取り、その後、足早にエスカレータを乗り換えて、3 階の出発ロビーまで移動する。使い慣れないコロコロのついたスーツケースが、エスカレータでひっかかりそうになれば、上級生や力のある子がフォローし、周囲に迷惑をかけることなく、スムーズに移動。すでにチームとしての協力体制が機能し始めていた。そんなこともあり、なんと 5 分で check-in が終わり、余裕をもって石垣島行き JTA に乗る準備が整った。

搭乗までの少しの間過ごす那覇空港の搭乗ゲート。免税店や沖縄フードが軒を連ね、ショッピング街を通り抜けると両サイドが窓の明るい待合席が広がる。那覇空港は、鹿児島空港に離発着する飛行機とはスケールが違う大型機も多く、国際線仕様の飛行機もたくさん停まる。抜けるような青空とのコントラストが爽快で、この空間に来る度に「ああ！沖縄に来たなあ〜♪」と思わせてくれる。空港内は旅行客がごった返してはいるが、ピスタチオグリーンの T シャツがしっかり仲間の位置を教えてくれる。子ども達は安心してそれぞれのペースで、景色や雰囲気を楽しみながら搭乗ゲートまで移動した。

那覇空港に着陸する際、上空から見えた海の美しさに感動していたようだが、一方で沖縄本島は開発が進み、赤土が露出していることも一目瞭然だった。河口付近の海は赤土が流れ込み、沖合の海の青さとのギャップに胸が締め付けられる。私自身、小さい頃から沖縄に空路訪れる度にこの光景を目の当たりにしてきて、環境保護と開発の問題をずっと刷り込まれてきたよう

に思う。海と山が川でつながっていることは、いつも森でも伝えていることだが、子ども達が実際に目でみて、この機に何かを感じとってくれたらと思う。

本島を離れてしまうと、石垣島への空路がまたそれは美しい景色。国立公園になった慶良間諸島や宮古島の上空では、窓際の席を途中交代しながら、そのエメラルドグリーンの海に大興奮し、持参した弁当を機内で頂きながら、いつまでも窓の外の風景に見とれていた。

すぐにあのエメラルドグリーンの海に飛び込みたい気持ちでいっぱいの子どもたちだったが、空港に着いたあともバスや船での移動が続く。暑さもあって、長い旅路にやや気が重くなっていた所、到着ロビーの自動ドア越しに180センチを裕に超える大男二人。満面の笑みで大きく手を振って、出迎えてくれた…今回お世話になる谷さんと、関西からきてくれたスタッフのおサルだ！軽い挨拶の後、聞けば、長い移動で疲れているであろう子どもたちのために、谷さんがバス会社に交渉し、50人乗りの新品バスをチャーターしてくれたとのこと！このスペシャル感が一気に子どもたちの重たい気持ちを吹っ飛ばしてくれた。そしてこのバス貸切に始まる様々なスペシャル待遇は、7日間の西表島滞在中、子ども達を常にハッピーにしてくれることになる。

40分程度のバスの車内では、改めて全員が自己紹介し合った。事前に配布しておいた「自己紹介シート」に皆よく目を通してきていたようで、ツッコミや質問などもでて盛り上がる。途中、谷さんが観光案内をしながらの移動で、石垣島の街並みや家屋、墓、シーサーなど、離島の文化にも触れることができた。大きなガジュマルの木、公園には石垣らしい遊具があるものの誰一人遊んでおらず、「あのブランコ、もったいない！乗りたいー！」という子どもたち。すかさず谷さんが、「沖縄では昼間遊ぶ人はいません。夕方からできます。ちなみに、昼間海に行く人もいません。観光客だけです」との話があり、「この日差しだもんね、なるほど」と納得。そんなこんなで、気が付けば石垣島フェリーターミナルに到着。谷さんのおかげで快適なバス移動となった。

石垣島フェリーターミナルはギンギンに冷房がきいていて、広くて天井の高い石の建物が暑い亜熱帯の日差しを防いでいる。窓の外には海が見えるものの、バスを降りてからの短い時間に実感した物凄い暑さに、外へいくことを躊躇している子どもたち。外に建っている「具志堅洋行」の銅像の真似をして、窓越しに遊ぶ。ターミナル内に並ぶ店を覗きながら、物珍しいお土産をさっそくみつけ「購入したい」という子もいた。美味しそうな冷やしパインやブルーシールのアイスクリームもあり、食べたそうにしている子もいたが、仲良くなった友だちと手遊びをしたり、おやつを交換するのを楽しんで、お小遣いは使わずに過ごした。一方、この後の乗船を気にして酔い止めを飲んで自己対策をする子もいた。少しずつ旅のルールや勝手を呑み込み始めてきた様子。

西表島は石垣島と同じような大きさだが、他島との交通手段は高速船しかないため、北の中原港と南の大原港に分かれて別々の船が往来する。今回の拠点、大原港。観光ポイントが北側に集中しているので、一見不便にも見えるが、大原港周辺には郵便局や公民館、スーパー（島1番大きい）などがあり、ヘリポートや診療所もあるなど、生活に必要なインフラがそろっていて、長期滞在には便利な港である。また南側のため、冬や台風でも海が荒れにくい。

大原行の高速船では、さっそく谷さんスペシャル第二弾！あらかじめ、私たちの乗船を船会

社に伝えておいてくれ、大型タイプの最新船が準備されていた！近海に台風もなく、まれに見る凧の上、大型の船…時々すれ違う船のひき波以外、全く揺れることはなく船酔いもでなかった。

朝 10 時の飛行機に乗ってから 17 時すぎ…西表島、初上陸。港の石碑の前で上陸記念の全員写真をパチリ！ここから歩いて 3 分のところが、谷さんのゲストハウス「島時間」。閑散としている港のアスファルト広場を、スーツケースをもってゴロゴロ移動。花もすっかり南国の装い。最後の坂道をのぼりきって、黄色い 3 階建てがみえてきた。

17 時半、まずはテラスに入所。テラスは、玄関前に広がるタイル張りの食事処で日中はカフェになっている。パッションフルーツがグリーンカーテンを作り、小さなハウスガーデンには、谷さんが一生懸命育てているバナナやパパイヤの木が所狭しと並んでいて、人だけでなく、小鳥たちの陽よけスペースになっている。7 日間、ここが私たちの夕食スペースになるとのこと。

テラスにてオリエンテーションをすませ、各部屋へ荷物を移動した後、18 時に再びテラスへ集合し、ライフジャケットやシュノーケルセット、フェルトブーツなど、このあと 7 日間お世話になる道具たちとの顔合わせ(サイズ合わせ)をすませた。

夕食はからあげ、サラダ、ショートパスタ、ご飯…滞在初日ということもあり、子どもたちが食べやすいものをとの、島人かーちゃんの配慮から。かーちゃんは、島時間の食事を一切取り仕切っている西表島出身のおばちゃん。谷さんが島時間をオープンした頃、大原にはまともな食事処がなかったそう。繁忙期でも店の都合で休んでしまうし、メニューのラインナップも少なく、大原の周辺では、決して観光客が満足いくような食事を得ることができなかった。かーちゃんは、西表島や沖縄の料理を得意としていて、今や島時間の食事処は、観光客にも人気の食堂になっている。西表島には「おもてなしには、山ほどの食事を」という文化があり、客が残すほど出すのがかーちゃんのモットーだそう。初日のからあげも恐ろしい大皿に山のように提供いただいたが、みごと完食の子どもたち。逆にかーちゃんをびっくりさせた、初回の食事となった。

日没が遅い西表島。ナイトツアーも私たちの都合に合わせては始まらない。終日移動で疲れもあったが、LED の懐中電灯をもらい、夜八時半に全員で出発。まずは、群れのゴキブリに遭遇。西表島でみると、昆虫だということがわかる。降るような星空、天の川の下、動きの早い大きなヤドカリ、「ホーホー」鳴くミミズクの親子。途中、港にも立ち寄り、船着き場から膝ぐらいまで海に入ると、カニ、サヨリの赤ちゃん。パチャパチャ足踏みすると、碧い光を放つ夜光虫の群れ！！網ですくったり、走り回ったりして大興奮。満月がのぼってくる前の絶妙な真っ暗闇。その中で、一部の空だけがやたら明々と見える。石垣島の上空だ。同じ八重山諸島でも、あれほど街の光が眩しければ、あちらでは天の川は見えない。もちろん、生きものの息吹も感じることは難しいだろう。離島ですらこんなに電気を使っている日本の実情…市街地の異常な明るさと天の川の美しさを同時に見上げながら、子どもたちも何かを感じたようだ。

◎二日目 「野生生物保護センター ・ 初シュノーケリング」

誰が起こすわけでもなく、6 時前からごそごそ起床し、屋上から朝日を拝む子どもたち。週末で地域のラジオ体操が休みというので、自分たちだけで体操。7 時から南国フルーツ一杯の朝食をすませ、大原集落の散策へ。西表島を、人々や建物、植物から感じてもらった。途中、日本で一番南にあるという神社へお参り。サトウキビ畑にも立ち寄り、写真を撮る。近くでみると大きくておおいかがさってくるような存在感。根っこが入り組んでいて機械化が難しいことがよくわかった。いかにもハブがいそうな根元に、ドキドキして近づけなかった。昔、紙が贅沢だったころ、お尻を拭いていたという葉っぱも教えてもらった。手で触る…産毛が優しくフワフワで、気持ちいい🌀

仲間大橋を歩いて渡り、橋の上から川と海が繋がっているのを目おろしながら、カヌーで川を上る観光客に手を振る。橋のたもとにはイリオモテヤマネコの像があり、数名の子どもたちは登って記念写真。バックにマングローブや真っ青なが写りこむ。

その後、車に乗り 10 分程移動。環境省が運営する〈西表野生生物保護センター〉（イリオモテヤマネコのミュージアム）へ。やや難しい展示ながら、一生懸命話を聞いたり読んだりの子どもたち。剥製の前では、集中してスケッチする様子も見られた。館内でクイズをクリアすると、イリオモテヤマネコ認定証が発行されると聞き、一心不乱に勉強して認定試験にチャレンジ。いつのまにかほぼ全員が初級～中級に合格。センターのスタッフが子どもたちの勢いに押されて、アップアップしていて笑えた。実力的には上級も目指せそうだったが、スタッフがお昼時間に入りたいたからと、断られた（笑）。無念の子どもたちだが、また来年リベンジすることにして施設を後にした。

午後は、待ちに待ったシュノーケリング。谷さん御用達、誰にも秘密の名もない西海岸にかけた。宿からは車で 10 分ほど。遠浅で藻場も広く、初めての練習には持ってこい。器具に慣れてきたら、沖のエメラルドグリーンの海に移動して、足のつかない場所で水中メガネの曇りをとったり水を抜く練習をしながら、海を独り占め。中学生や上級生はすぐにコツを掴んで、スイスイ泳ぎ出す。色とりどりの見たことのない熱帯魚がそこそこに！それを小さな子どもたちがみてチャレンジするという感じで、おやつ休憩を入れて 3 時間！！たっぷり練習した。後半は浜で砂遊びに興じる子どもたちも。それぞれが初めてのエメラルドグリーンの海を満喫した。

今夕から、本格的に片づけや洗濯などの身の回りの作業が、遊んだあとについてくる。二日目は海に入ったので、限られたシャワー時間の中で、自分で下洗いをして塩抜きをしなければならない。終わったらグループで水着類一式をまとめ、コインランドリーで洗濯する。洗濯が終わったら夕食までの間にすべて干す。コインランドリーが回っているわずかな時間にも水筒を濯いだりリュックを干したり、髪を乾かしたり…と、意外と休んでいる時間はない。借りている道具類は、初日は谷さんに返却すれば片づけておいてくれたが、慣れてきたらそれも自分たちでやらなければならない。

洗濯を終え、モリモリと晩御飯を食べる。食後は、本来有料の自転車を無料で借りて、食事が終わった順にサイクリングして回った。大人用の自転車だが、夕日の中、がんばって乗りこ

なす子ども達。小さな子も感化され練習に励む。シャワーをあびてきれいになったはずなのに、すっかり全身汗だくになっている。自転車に乗って近所のスーパーへ夜のおやつを買いに行くことも、この日から日課となった。その他、ビーチボールやフリスビーでの集団遊び。食後、必ず近所の公民館広場にいき、全員で遊ぶ。輪になったりチームに分かれたり、ドッチボールやバレーボールなどを楽しそうにやっている。これがやりたくて、みな食事を早く食べ終わろうと頑張ってしまうほどだ（笑）。なぜかそこにいるヤギにエサをやったり、ヤモリを捕まえたり、本気で鬼ごっこをしたり、サッカーしたり、だるまさんがころんだをしたり…あれだけ昼間体を動かしているのに、体力が余っているとは思えないのだが。たぶん、楽しくて疲れを忘れていただけ（笑）。すべて力を出し切って一日を終えるので、夜はもちろん、朝まで熟睡の子ども達である。

◎三日目「浦内川ジャングルトレッキング」

マリウドの滝 ・ カンピレーの滝

台風がこない今夏、マンゴーの最盛期が長くなり、本来7月初旬で終わってしまう収穫が滞在中も続いていた。供給量が限られる島内で、谷さんの顔ききによって島時間にはたくさんのマンゴーが届けられる。南国のフルーツがお腹いっぱい頂けるのも、地元であってもスペシャル。大好きなマンゴーを毎朝山盛り食べられる贅沢に、感謝♥感謝の舌鼓。マンゴーやパイナップルの豊富な繊維質の食事は、日焼けのケアだけでなくお通じも促す。早寝早起きや終日の運動、規則正しい生活も加わって、自然とお腹の調子が整う。毎日ほぼ全員が、でかける前にトイレを済ませていた。

出発時間は日によって変わるが、大抵8時半前後。朝食を7時から自由にとって、出発までの時間はそれぞれで準備に取り掛かる。活動によって服装も装備も異なるため、朝食時の指示を漏らさず聞き、時間内にもれなく準備しなければならない。フィールドでの活動では、持ち物の不備は命にかかわることもある。中でも、水筒の氷や水の補給、おやつ準備、日焼け止めを塗るなどのルーティーンは、欠かさずやらなければいけない最優先事項。加えて今日は、ジャングルを歩いたりコケむした石の河原で遊ぶため、フェルトブーツ、弁当、タオルを各自持たないといけない。

2台の車に分乗し60分ほど移動。浦内川の河口から、マングローブの森をぬけて上流へ向かう観光船に乗り、滝を目指すジャングルトレッキング。車の中では、しりとりや歌ったりの元気元気の子ども達。2台では定員オーバーのため、あかりんとおサルは、原付バイクで車を追いかける。炎天下、おまけに叩きつけるようなスコールと、西表島の夏のツーリングはなかなかきつそう（(;^ω^)）。でも二人とも「他では味わえない体験♪」を楽しんでくれている。

車が浦内川河口に到着後、しばらくしてあかりんたちも合流し、駐車場にてフェルトブーツを着用し、浦内川河口の看板で記念写真。出発までの間、船着き場で少しの時間、座って並んで待機。離脱して、木に登る子、おかしをすでにつまみ食いする子、水岸から川をのぞき込む子…ちょっとした、ゆったり時間。

浦内川は、西表島で一番長い川。以前は上流に集落もあり、田んぼや畑をして暮らしていたとのこと。汽水域の浦内川の上流には、サメがあがってきたり、世界最大のシジミ（大人の手のひらぐらい）がいたり、何もかも亜熱帯アメイジング！！そんな話を聞きながら、観光船に乗っていると、みんなの間を心地よい風が通り抜けていく。日差しは強いものの、日蔭に入るととても涼しいのも西表島の夏ならではの。そして、これぞ「THE 西表島」の絶景…初日に橋の上からみた仲間川と一緒に、下流はエメラルドグリーン的大海、左右はマングローブ、上流はジャングル、そして真っ青な空、白い雲…人工物は一切ない。西表島のマングローブを構成するのは、メヒルギ、オヒルギ、ヤエヤマヒルギの三種類。見れば見るほどフシギな植物。河口付近はジャングルから流れ込む栄養豊かな土が濁流として混ざり合い、その境目には新たな新天地を求めて、勇気あるマングローブが果敢に水中へ根を下ろしている。マングローブの根元には、潮がひけば、トビー（ヤエヤマトビハゼ）や、シオマネキといったカニ類、エビ類、貝

類が顔を出す。そんな景色を左右に見ながら、40分ほどで下船。そこから2時間弱のジャングルトレッキングが始まった。ちなみに、16人分の弁当や飲物（約20kg！！）は、すべて谷さんが背負ってくれて先頭を歩いてくれた。子どもたちは水筒、おやつ、タオルだけの身軽な恰好だが、元陸上国体優勝の経歴を持つ強靱な谷さんのペースについていくのは、それでもかなり大変（笑）。

途中、小さな沢をみつけて手や顔の汗を洗い流したり、水筒に水を補給しながらシダ類が茂る深いジャングルを進む。西表島の森には、不快な蚊やハエのような虫がほとんどいない。川が塩分を含んでいるため幼虫が育たないのか。西表島の独特の空気を肌で感じながら歩いていく。これも普段、自然の中に身を置いているからできることなのかもしれない。ちなみに、本土のに比べ、カラスやワシがとても小柄でびっくりする。天敵が少ない為と考えられている。

道中、中学生が小さな子とペースをあわせて歩き、荷物を持ったりとフォローしてくれ、慣れない子どもたちも気持ちが途切れることなく、無事踏破できた。

一方、高学年の小学生グループは「しりとりに」をしながらゲラゲラ笑い、歌を歌ったり…。途中、サキシマスオウノキをみつけ記念撮影。水たまりにカニを発見して観察したり、沢では頭や顔を洗って涼をとる。歩くペースを緩めたり、早めたりしながら、トレッキングを楽しんでいるところなど、さすが森でのこれまでの経験が生かされている。

無口に必死にひたすら歩く子どももいた。ジャングルの中は、うっそうと茂る木々により直射は当たらないが、その分風が通らないため少し蒸し暑い。子どもたちは長袖長ズボンを着用していて、暑さはそれぞれの体力をじわりじわりと消耗していく。水筒に沢山詰めてきた氷は重たかったけれど、暑くなってくればとてもおいしい。残った氷にジャングルの沢の水を足し水分補給をしながら歩く、歩く、歩く…。

90分ほどで「マリウドの滝」展望台に到着。日本の滝100選にふさわしく、絵はがきのような景色が広がる。マリウドの滝では、昨年、滑落事故があったということで、以前は近づけた滝周辺が立入禁止になっていた。確かに、遠く見下ろしてみても相当な岩場だ。私たちも自然を侮ってはいけなし、気を抜いてはいけなし。暑さと疲労でぼーっとしてきた頭に「おっしゃ～！！カンピレーの上流で遊ぶぞー」と自ら喝を入れ、おやつ冷凍ゼリーを口にして元気を補給しようひと踏ん張り。その後、30分ほどでカンピレーの滝に到着した。

まずはグループごとに記念写真。なんととってもスケールが大きいから、観光客がそこそ居てもまばらに見える。その中でも、滝で遊ぼうというのは私たちだけだ。西表島は日帰りで訪れる観光客がとても多い。石垣島を拠点に、一日だけアクティビティをしにやってくる。軽装で無謀に見えるし、最終便の高速船の時間があるから、なんだかスケジュールに追われていて慌ただしく危なっかしい。苦勞してたどり着いたカンピレーの滝で記念写真だけを撮りそそくさと折り返すというのが、9割がたの観光客の楽しみ方だ。この日もカンピレーまで来た観光客のうち、1組の親子だけが水着でトレッキングしていた。その親子も、ずいぶん早い折り返し船を予約していたようで、30分ほどでそそくさと帰ってしまった。その息子は私たちを羨ましそうにみながら、父親につれられて滝をあとにした。そして私たちは、今日も「貸切状態」で、スペシャルにカンピレーを楽しむことになる。

雄大な岩場をくねくねと水が流れながら、小石がやわらかい岩肌を長い年月をかけてクルク

ルと削り取り大きなポットホールを作る。カンピレーの河原にはこのポットホールが無数に存在し、幻想的な風景をジャングルの中に作り出している。子どもたちもこのポットホールにはたいそう関心を示し、勇気ある子から一人ずつ足を入れていく。周囲はくるぶしぐらいしかない深さなのだが、ポットホールは半径1m半前後、深さは2m以上で大人でも足がつかない。無論底には光も届かず、何があるかも見えない。大人はその恐怖から到底足すら入れる気にならないが、子どもたちはそこへどンドン飛び込み始めた。拳句の果てには垂直に素潜りし、底にある小石を拾ってくるという競争まで。そこかしこのポットホールでは、偶然に一緒になった子ども同志が和気あいあいと話しをしている。縁につかまり、胸まで浸かっている様は、まさに温泉に浸かって話し込む風景そのもの(笑)。浅めのポットホールにはオタマジャクシや小魚、エビが生息していて、それを弁当がらを使って捕まえようとする子、頭から滝修行みたいな滝遊びをする子、滝の奥に顔をだしてみたり往来する子、滝の流れに流されてみたり、川に飛び込んだり…。日本の果てのジャングルの奥地で、滝遊び・川遊びを堪能。弁当をねらって近付いてくるカラスたち。子ども達も負けじと知恵を使い、輪ゴムを鉄砲がわりにカラスを追い払う。そんな彼らの知恵や遊びこむ力に、谷さんも感心し微笑んでいた。

あまりに楽しすぎて、いつまでも帰ろうとしない子どもたち。谷さんと相談し、観光船に間に合うギリギリまでカンピレーに滞在し、よーいどんで滝を離れようとした矢先、急に雲行きが怪しくなって雷とスコールがやってきた。濡れるのは問題ないが河原の雷は怖いので、足早にジャングルに飛び込んだ。あとは船の時間に合わせて、スピードアップで歩くしかない。歌を歌い、しりとりをしながら、全員でハイペースでジャングルを駆け抜ける。行きはあんなにしんどかった道も、帰りは体も心も軽やか、ステップも軽い。ケガにだけは気を付けるように指示をだし軽快に歩き抜いた。帰りはなんと70分で下山！早めに船着き場についたため、谷さんから、「もう一度川遊びをしてよろしい」とのお達し。「やっほー！！」との歓声と同時に、全員が近くの川に再び飛び込んだ。船が到着して乗り込む直前まで、全員カッパのように遊んだ。当初は表情も心のガードも固めだった中学生たちが、この日の川と滝で満面の笑みをみせてくれたのは、とても嬉しかった。よくしゃべり、よく歌い、つまらない意地や恰好つけた鎧を脱ぎ捨て、年下の仲間たちとのびやかに心を解き放っていた。

浦内川河口から島時間までのドライブ。海を左手に1時間近く走る。ものすごいスコールがあったり、熱い日差しが覗いたり。車も冷房をかけずに窓を全開にして走る。歌を歌っていると、風と同化したような気分になる。theBOOMの♪風になりたい♪を熱唱した。ひとしきり歌い終わった後、「あれ？妹、どんな顔してたっけ？？思い出せない～(笑)！」「家族の顔、忘れちゃった(笑)」。そろそろホームシックになるかと思いきや、この頃から「帰りたくない病」が、年齢性別問わず発症し始めた。

就寝前には、45分ほどのふりかえりを始めたのも3日目から。夕食後、サイクリングや外遊びですべての体力を使い切る子ども達にとっては、疲れも眠気も襲うハードな時間帯ではあるが、趣旨を理解してもらい、全員に每晚参加してもらった。3日目になると多少疲れも溜まり、また慣れてきた中で思いやりに欠ける言動も。ふりかえりは、自分自身を客観視する時間であり、互いの良さを認め合い、仲間を受け入れたり尊重(リスペクト)する、大切な時間と位置付けている。最初は要領を得なかった小さな子どもたちも、上級生のやり方や内容を見たり聞いて

たりしていくなかで、徐々に上達し、毎晩とても有意義な時間を過ごすことができた上級生が持ち回りで司会をし、スタッフは原則関わらない。15分ほどの個人作業(記入)の後、全員の前で発表するというだけなのだが、このツアーの成功のカギは、昼間のどの活動よりも、この毎晩のふりかえりの時間がとても大きな役割を担ってきたと思う(各自のふりかえりシートは、別紙)。

◎四日目 「公共バスの旅 ・ 星砂の浜シュノーケリング」

いつものように朝食をすませ、公共バスに一時間近くゆられて、念願の星砂の浜へ。子ども達の期待は大きい。シュノーケルやフィン、タオル、着替えなどすべて自分たちで持つての移動。こんな時はいろいろハプニングもある。何しろ谷さんが唯一同行しない日なので、自分たちだけで目的地まで無事に行けるかだけでも大チャレンジ。

さっそく行きのバスでは、キャプテンハーロックみたいなサングラスに船長帽、休憩場所では必ずくわえたばこの、柄の悪い運転手に乗車直後から重圧をかけられ、車内は不穏な空気。しかし、真夏に 60 分も長距離を利用する私たちのような団体客などおらず、結局この日のバスも貸切状態。途中、i ターンか何かで西表島に住み着いたようなチャラ目のお兄ちゃんが乗車してきて彼に挨拶もなしにスマホをいじっていたから、この不義理な態度にキャプテンハーロックはプチ切れて叱り飛ばすシーンも…(;^ω^)。子どもたちはキャプテンの強面の顔をバックミラーを覗きながら、静かに穏便に、波風をたてないよう、最後までマナーを守って移動、とぼっちりを食うことなく、無事に下車。

降りたバス停から 100m 歩くと、そこには天国とも思えるような情景が広がっている。海の色の美しさに誰もが惹かれて波打ち際まで一直線に向かうが、その足元すべてが実は「星砂」の浜。星砂は有孔虫の死骸。沖合の藻場に棲息している有孔虫が死んで藻から外れた後、波の力によって浜に打ち上げられたもの。西表島と竹富島、鳩間島でしか見ることができない。特に西表島の星砂の浜は、量が多く簡単に目視できる。西表島のそれは、どうやら鳩間島沖から流れ着いているらしい。ビーチの看板には、「持ち帰るのは、思い出だけ」と書いてあった。そういえば、かつてこの浜を訪れた時からこの看板があったことを思い出した。

いろいろ考えたが、準備していた試験管一本分を一人の上限に持ち帰ることを許した。これは、ビーチサンダルで浜を歩けば足についてきてしまう程度の量だ。子どもたちには、その希少性は十分伝えたつもりである。旅に出る前に兄弟や家族と約束をしてくたり、友だちからせがまれている子もいたようだったので、その子なりの事情もあるだろうから、それぞれが判断して持ち帰る量は任せた。でも、実際はそうやって沖縄のサンゴは乱獲され、目も当てられない状況になっている。「自分だけなら…」という気持ちも、やはり一番問題なのである。そのことを学んでほしい気持ちもあった。手元に持ち帰った一粒が、ゴミにならず、お土産や思い出になっていることを切に願う。

潮は午後の干潮にむけて順調にひいていき、みるみる浅瀬が出現してきた。実は入り江で潮がひいていく時が沖にもっていかれる流れが強く、素人には一番危ない。潮の流れを見ながら安全なポイントをさぐる。そうすれば、子どもたちの泳力でも十分シュノーケルが楽しめる。この浜は、波打ち際からすぐにポイントがひしめいているため、泳力の乏しい子でもさほど苦勞せず近づける場所だ。星砂の存在も手伝って、観光客や親子づれも多く見受けられる。例えば西表島で他の観光客と接触があったのは、後にも先にもこの日の浜だけである。

日蔭がほとんどない浜なので長居できるか心配していたが、ここも谷さんの計らいで、極近の 1 軒しかない食堂に交渉し温かい八重山そばを頂き、快適にゆっくり休憩できた。バスに乗るまえのシャワーもここで借りて、安心して折り返しバスギリギリまで遊んで過ごせた。実は

前日のカンピレーの滝で頂いた弁当も、ここ、「星砂荘」のおじいとおばあの手作りだった。昨日、浦内川に向かう途中に星砂荘に立ち寄り、弁当を購入しながら、谷さんがご夫婦を紹介してくれ、事前に挨拶をすることができていた。子どもたちも一緒に「明日はよろしく願います！」と元気に挨拶し、「待ってるよ～」と声をかけて頂いていた。

シュノーケルに疲れた後、ランチを頂こうと星砂荘に向かうと、なんと「貸切」の看板。冷房を効かせた海のみえる明るい星砂荘の食堂で、冷凍パインのサービスや、おかわりの対応まで、ありったけのもてなしで私たちだけを特別にあたたかく迎え入れてくれた。

子どもたちは、谷さんと現地の人とのやりとりの中で、大切なことに気づき始めていた。なぜ自分たちが行く先々でこうも手厚い待遇で早く受け入れてもらえるのか、そしてそのことに、自分たちはどういう態度を示さなければならないか…。自然と「ありがとうございます」や「ごちそうさまでした」という言葉に、気持ちが載ってくる。言葉に気持ちが載るから、相手にも沢山のことが伝わり、さらにそれが二倍三倍になってまた巡ってくる。挨拶する声も初日CAとモジモジしていたやり取りとは比べ物にならないほど、大きくはっきりと、それも笑顔で伝えられるようになってきた。

そのことが更に実感できたのは、帰りのバスでの出来事である。行きにわかったことだが、実は、島内のバスの運転手は、あのキャプテンハーロック一人しかいなかった。当然、帰りのバスも、彼が運転手だということを手で私たちに気づいていた。そして彼が「児玉」という名前であることも常連客との会話から把握していた。暑い中、一日中バスを一人で運転する重労働。態度の悪い客やマナーの悪いお客も少なからずいるだろうしライラすることもあるだろう。ましてあの見た目だから、先入観を持たれることもあるかもしれない。私たちも先入観をバリバリ持って、例外ではなかった。

帰りのバスがやってきた。ドアが開くと、想定どおりキャプテンハーロックが私たちを強い眼力で迎え入れた。子どもたちとは打合せしたわけではないが、自然と乗車時に「児玉さん、よろしくお願いします！」「お世話になります！」などの元気な挨拶が発せられた。16人のニコニコの笑顔と素直な挨拶に、一気に児玉さんとの厚い壁が崩れ去った。

その後の60分は、ありえないような盛り上がりの車中となった。児玉さんは実に流暢でわかりやすい観光ガイドをしながら運転してくれ、時折クイズなどを盛り込んで子どもたちをそのトークで惹きつけてやまない。子どもたちからも様々な質問がでて、児玉さんは運転しながらそのすべてに丁寧な回答&解説をしてくれた。後半はおやつを渡したり、歌をうたったりと（もちろん貸切状態なのでできたことだが）、行きの緊張からは考えられない楽しい道中。途中、あかりんが、通り沿いの染物屋さんで母親の誕生日プレゼントを探したいという希望にこたえて、バス停でもない店の前にわざわざ止め、買い物がすむまで停車してくれた。最後には、疲れた子どもたちのことを気遣って、これまたバス停でもない「島時間」の目の前で下車させてくださった。子どもたちは楽しい時間を地元の方と過ごすことができ、心から「ありがとうございました！」と伝えた。そして下車後、「児玉さん、実は超いい人だったね♥」とみんなで大笑いした。

夜のふりかえりでは、家族から預かってきたハガキを渡した。笑って照れる子、涙ぐむ子、それぞれが久しぶりに、鹿児島在日常や家族に思いをはせていた。

◎五日目 「シイラ川カヌー ・ ユツン川飛び込み合戦」

午前中は、仲間川支流のシイラ川でカヌーを楽しんだ。浦内川の観光船と違い、間近に水面を感じることができる。観光船では入っていけない細い支流へも行けるのがカヌーの醍醐味で、手が届きそうなほど近くにマングローブの森を見ながら、上げ潮の力を借りてスイスイと上流を目指した。

2人ないし3人乗りのカヌー。体力や経験値を配慮して組み合わせを決めた。ここで現場をリードするのは、おサル。実はボートの国体6位の経歴を持つ剛腕。他では、まあまあなおサルだが（笑）カヌーの時ばかりはとて心強く頼りになる。といっても、おサルのを借りる必要もないほどみな上手にカヌーを操り、バディと自由に行き来していたため、ほぼおサルの出番はなかった（笑）。

最上流では、カヌーを降りて、今日も懲りずにまたまた川へドボンッ。上げ潮なので上流域といっても周辺にも海水が入り込んできている。汽水域では面白い現象が体感できる。海水は淡水に比べて比重が重い為、下のほうへもぐりこみ、川の水は淡水なので上に流れている。川に飛び込むとこの違いを体で感じることができる。二つの水には実は水温差があり、その境界を実感することができるのだ。海で温められた海水に比べ、淡水の川の水はとて冷たい。川に飛び込んでみると、上は冷たくて震えるほどなのに足を底へのばすとお湯のような温かさを感じることができる。その境目が海水と淡水の境目なのだ。まさに西表島ならではの体験だ。子どもたちは口々に「つめたーい」「あったかーい」「やっば、つめたーい！」とはしゃいでいる。

今年は台風1号の発生が遅く影響が皆無だったため、本来残っているはずがないサガリバナが、まだ可憐な花を咲かせて水面を漂っていた。サガリバナはマングローブの森に咲く花で、夜咲いて明け方にはみんな散ってしまう。すべて水面に落ちるため、6月の花盛りの頃には、早朝のサガリバナツアーが催される。そのころは、美しい花々がマングローブの川を埋め尽くすという。7月下旬のカヌーでこれほどのサガリバナを子どもたちにみせてやれたのは、本当にラッキーだった。この日は風もなく、水面に空が写り込む風景も目にできて、静かに川を下りながら、雄大な景色をこれまた独り占めした。

午前中のカヌーツアーを終え、島時間に戻って山ほどカレーを食した。この日の食欲はすさまじく、かあちゃんが想定していた二倍のご飯とカレーをたいらげてしまったほどだ。しかし、休憩もつかの間、午後はユツン川へと車を走らせ、高さ5mの飛び込み合戦が始まる。（詳細はfacebook動画を）みんなで励まし合い、結局全員が制覇！それも何度も！

早いもので5日目が終わった。目いっぱい遊んで帰ってきて、ちゃんと自分のこともできるようになった。洗濯もすっかり上手になったし、手際もよくなった。小さい子の足りないところは上級生が自然と面倒をみて、<「ありがとう」の花♪>（←子どもたちがツアー中好んで歌っていた歌のひとつ）がたくさん咲いていた。道具の片づけや管理、おやつや量やタイミング、お小遣いの管理もばっちりだ。

食事自分が嫌いなものを積極的に取り、体のことを考えて野菜をがんばって食べるようになった。一日中屋外でめいっぱい遊ぶには相当な体力が必要で、きっちり食べることが不可欠

であることを子ども自身が気づいた。ランチのカレーに限らず、子どもたちの食がみるみる旺盛になっていった。食べなければと悟ったことで一生懸命食べ、その結果バテることなく終日炎天下でも活動ができ、結果お腹がすいてくる、というリズムが出来上がる。当然、便通もよくなり、頭痛や腹痛を訴える子どもは一人もでなかった。食べて動いて、疲れて寝る。まったくもって健全であり、成長期の子どもにとっては至極当たり前でありながら現代ではなかなか難しいことが、いとも簡単に取り戻せた。ツアーの効果はこんな点にもあるのかもしれない。

朝もスタッフが起こさずとも、起きた一人が隣を起こし、スタッフがいないとも地域のラジオ体操に参加している子たちも大勢いた。困ったことが発生しても、すぐにスタッフルームに駆け込んでくることはなくなった。各部屋や自分たちで協力しあい、自分で頑張っ乗り越えているらしい。スタッフに質問をしてくる回数もめっきり少なくなった。だれもが自分で考え、行動し、解決している。何事も経験。なかでも、苦労や不自由な環境がやっぱり人を育てるんだと、目を見張るような成長を遂げる子どもたちを見ながら感じた。

◎六日目「ミズウチ川～水落の滝～…最後の秘境★イダの浜へ」

どうしても子どもたちにみせたかった最後の秘境、イダの浜。最終日は、これまでで一番遠いところへ向かう。車で70分強移動して、小さな入り江の白浜港へ。ここから谷さんの知合いのチャーター船に乗り込む。途中、ミズウチ川を上流へ支流を入れていくと、そそり立つ岩場に突き当たる…滝！！ボートの先端に座れば、上から滝が降ってくる。全員が交代しながら「水落の滝」の洗礼を受ける。もう水しぶきを躊躇する子はいない。6日目を迎え、子ども達はすっかり陽に焼け一段とたくましく見える。チャーター船の先端に上手に座り、滝をあび、風を全身で感じている後ろ姿は、すっかり西表島に溶け込んでいる自然児。そして、仲間たちとその瞬間を共有し、全力で楽しみ、いつのまにか兄弟のような家族のような、そんな絆で一人一人が結ばれている。そしてその中に自分があることを、それぞれの子どもが幸福に感じている。

再び海へとミズウチ川を下ると、今度はウミガメの棲息エリアへ。チャーター船の左右の縁へ全員がよじ登り、上手に柱やロープにつかまりながら体を固定し落ちないように、海上へ身を乗り出す。10頭以上の大型のウミガメが船の右を左を泳いでいる。船長がうまく船をコントロールし近づくと、ウミガメはびっくりして逃げる。そのスピードがこれまたものすごい速さで、船でも到底追いつけず振り切られてしまう。のろまだと思っていたカメがあんなに速く泳ぐなんて！！と感動する子どもたち。多いときは60頭ほどが顔を出すという。

子ども達の体力を考えて、通常は陸路でいく秘境のへ、船でそのまま沖合からアプローチ。いよいよ最後のシュノーケリングの舞台、イダの浜へ上陸。浜はすべてサンゴのかけら。真っ白な枝サンゴでできている。寄せる波は小さいが、サンゴにぶつかる波音がカラカラと心地よく、星砂の浜とは全く違う音色を醸し出す、白い色の海岸線。

「今日は沖の絶景ポイントまでいく。自信のない子は無理しなくていい。自信なくても頑張れる子がついてこい、谷さんが手伝う。頑張った先に、すばらしい景色をみせるから」今日の谷さんはいつもにも増して力がこもっている。このイダの浜を子どもたち全員にみせたくてここまで来たという気持ちは、スタッフと同じである。

水中メガネの曇り止めも自分たちでできるようになり、練習初日のような「サイズがあわない」とか、「フィンが履きにくい」などとグチグチいう子は一人もいない。誰もが無言でテキパキと準備をこなし、小さな二人の女の子が自ら進んでがっつりと谷さんの左右隣を占有し海へ飛び込んでいった。後を追うように、シュノーケルが初めての子もしっかりと集団についていく。10mも泳げないはずだった子も見よう見まねで、泳ぎの上手な子に引っ張ってもらいながら懸命に波間を進む。途中、流されたりもしながら、余裕があるものはのんびりとシュノーケリングを楽しみながら、全員2kmは泳いだのではないだろうか。それも水深10mはあるようなところである。目下には、世界に誇る枝サンゴやテーブルサンゴの群生が広がる。これまで潜ってきた海とはくらべものにならない規模のサンゴ礁に、カラフルな無数の熱帯魚。

泳ぎがうまくなった子は、谷さんに許可を得てライフジャケットをぬぎ、素潜りを始めた。フィンを自在にあやつり、数mを耳抜きしながら潜っていく。上昇後は、シュノーケルの空気穴から勢いよく潮を吹きあげる。20cmはあるオオシャコガイや、30cm以上のなまこを海底か

らとってきては子どもたちに触らせてくれた谷さん。この6日間、朝から晩まで本当によく付き合ってくれた。といっても、私たちが休憩している時間にも、他の客を連れ立って別のツアーを案内し、夕飯もほとんど取らずにサンセットシュノーケルやナイトツアーに毎晩でかけていた。谷さんいわく、彼のエネルギーは子どもたちの喜ぶ顔や感激してくれる姿だという。今回参加してくれた13人は、これまで谷さんが連れ立った子どもたちの中でも、積極的で元気があり、創造的で、なんといっても感性や情緒が豊かな子どもたちだったと褒めてくれた。

ガツガツいく先頭グループに対し、足手まといになるのではと周囲を気づかって浅瀬にいた子もいた。そんなこと気にせず、絶対にこの海の魚たちに会ってほしい、心も体も思い切り海に任せて浮かんでほしいと、手をつないで全員を沖へ連れ出した。谷さんが子どもたちにみせたかった世界一の枝サンゴの森。ニモ（カクレクマノミ）のファミリー、目の前を何千という魚の群れが横切っていく風景を、どこまでも青く透き通る海にプカプカと浮かびながら、時間を忘れて見とれていた。

ランチは、小さな集落内にある「ぶーの家」でお手製のイノシシ&チキンカレーを頂く。座席が足りない、とわざわざ木製の椅子とテーブルを新調してくれる歓迎ぶり。もちろん谷さんのおかげだ。ここでも子どもたちはカレーを山ほどおかわりし、パッションフルーツのフレッシュジュースの歓待を受ける。ご主人が毎日草取りをして整備しているという自慢の庭には、パイナップルやバナナ、ヤシの木が生い茂り、気持ちいい木陰を作っていて、その下にはハンモックがいくつも張られていた。あまりの居心地のよさに、もっとくつろいでいたかったが、心を鬼にして再び海に戻り、本当に最後のシュノーケリングに全員で没頭した。

イダの浜からの帰りのボート。みんな清々しい笑顔。谷さんにサプライズの歌のプレゼント。愛と感謝の気持ちを込めて…数日前から替え歌を作り、谷さんにみつからないよう、それぞれで練習を積んできた。ボートのエンジン音と波しぶきに負けないようにと、大きな声で谷さんに向かって全員で歌う（以下、2曲）。谷さんは、聞き取ろうと必死に耳を傾けてくれた。

★kiroro♪Best Friends♪

もう大丈夫 心配ないと 泣きそうな わたしのそばで

いつもかわらない えがおで ささやいてくれた

「ライフジャケット 忘れるなよ」「軍手も 水筒も 忘れるなよ」

時には急ぎすぎて 忘れちゃう ことも あるよ

しかたない

ずっと見守っているからって えがおで いつものように だきしめた

谷さんの えがおに 何度 支えられたらう

ありがとう ありがとう 谷さん

★The BOOM♪風になりたい♪

天国じゃなくても らくえんじゃなくても

谷さんに会えた 幸せ 感じて 風になりたい

夕飯はサプライズのルリコ誕生日会。かあちゃんが特製のヤマネコケーキを2つもこしらえてお祝いに花を添えてくれた。3日前からコソコソと内緒で色紙を回覧し、子どもたちがメッセージカードを作っていた。夕食最終日ということもあり、谷さんからも石垣牛のBBQを山ほど振る舞ってくれた。

夕飯後、恋バナや学校の愚痴で盛り上がる子どもたち。普段、こんな子どもらしい話もなかなか機会がないのか、吐き出すように話していた。西表島に来て、日常のストレスや我慢、本音みたいなものがポロリポロリと顔を出す。少しはそういった発散にも役立っていたら嬉しい。持ってきたフリスビーとビーチボールをもって、今夜も公民館の庭へ直行する子も。学年や性別を超え、13人が兄弟のように楽しそうにゲラゲラ笑い、よく分からない遊びに目いっぱい興じる60分。本当に楽しそうだ。見ているこちらが幸せな気分になる。

内容的に、個人作業や個人での挑戦が多いツアーだったにもかかわらず全体がこれほどまとまったのは、子ども達だけの時間、つまりは小さな交流や遊び時間が充分にとれたことによることは確かだ。食事時間も全員が揃うまで待つとか、朝は全員で起床してラジオ体操といったことはなく、海や川での活動時間以外ゆるやかな集合体であったことが、子ども達の心のゆとりにつながった。学校や地域のキャンプでありがちな受動的活動や規則正しい全員合同の動きは、日中の活動が終わっても子どもに緊張感をいつまでも強いて、気づかぬうちに精神的疲労がたまるもの。それが目的だと言われればそれまでだが、長期戦でかつ活動充実に重きを置いている今回のツアーでは、むしろ自主性を重んじ、自分のことを自分ができるレベルでやらせればそれで十分であった。かえってその自由度の中で、自分を律する姿勢が芽生え、誰もがしっかりと身の回りのことも食事も健康も自己管理し、友だちへのリスペクトや周囲への思いやりを持てる心が育っていったように思う。

というわけで、毎晩のように食事の後に繰り広げられた、恋バナと外遊び。どれだけ日中の活動で疲れても、夕飯後のおやつの買いたしと、この遊び時間だけは、絶対に休まず続けた子どもたちであった。

◎七日目 「さようなら西表島～鹿児島への帰路」

最後の朝食をすませ、9時半の船に乗る。谷さんは今日もツアーにでかけると言って、ゆっくりお別れはできなかった。それほど谷さんが忙しいことは、日ごろの谷さんを見て子ども達はよくわかっていたが、それはそれでとても寂しい出発であった。谷さんももちろん、同じ気持ち。分刻みのスケジュールの中、別の客の相手をしたリツアー出発の準備の合間、ほんの数分の時間を作って、子ども達の見送りに玄関へ来てくれた。「ありがとうございました!」「来年また来いよ」とかたい握手や抱擁を交わした。涙が潤んでいる子もいた。

港の小さなお土産屋に立ち寄りながら、気ぜわしく買い物をすませ、石垣島行き的高速船に飛び乗る。船での出発は、本当に寂しい気持ちになる。子ども達もみな無言で出港後も木々の合間にみえた黄色い建物と見えない谷さんに手を振っていた。

石垣港からは公共バスにのり、空港までの移動。ほとんどの子ども達は寝てしまった。みな元気がない。聞けば「帰りたくない」という。「今なら戻れるのに」と。

石垣空港でのチェックインもスムーズにすみ、関空に向かうおサルとはここでお別れ。全員で手荷物検査場をぬけるおサルを最後まで見送る。その後、空港のフードコートで早めの昼食をすませる。最後の八重山そばを食べる子、石垣牛の牛丼を食べる子、様々。サンドイッチやおにぎりでお小遣いをセーブする子もいる。デザートに石垣の塩が入ったジェラートを食べる子もいた。友だちが食べているのを見て、買いに走る子も。

那覇空港へ到着後、市内観光に行くか話し合いをした。せっかくだから行きたいという子がほとんどだったが、外の暑さや移動の負担を考えると躊躇する子も。首里城やブルーシールの本店はとても魅力的に聞こえるものの、今回は海と川とマングローブ一色の思い出だけでもいい気がしてきた。誰もが西表島の余韻にまだまだ浸っていたいという感じ。スタッフを含めて全員が、島をあとにしたホームシックのどん底にいた(笑)。

那覇空港は4階建てで見通しもよく、店舗の数もイオンと同じような規模。小中学生の子どもにとっては、自分たちだけで買い物したりお土産を探すには丁度よい広さ。結局、残ったお小遣いを片手に、空港内でゆっくり過ごすことにした。運よく全員が座れる景色のよいベンチも確保できたので、そこを拠点に子ども達は出かけたったり戻ってきたり…。途中、吹き抜けの2階～4階のスペースをつかって、ドロケイ(刑事と泥棒役に分かれた鬼ごっこ)に興じる。1週間我慢していた少年ジャンプを購入し読みふけていた子も、貯めてきたお小遣いをプリクラやUFOキャッチャーにつぎこんでいた子も、全員がそれぞれのチームに分かれて参加した。

観光客にまぎれて緑のTシャツが空港のここかしこに出没する。北で探し回る刑事がいれば、南で舌をだして観光客にまぎれて立ち読みしている泥棒がいる。必死に4階を捜す刑事と2階を逃げる泥棒…吹き抜けなので拠点ベンチからは丸見えなのだが、子ども達が結構必死になって興じる様はとても面白かった。

18時には夕食をすませるようにと指示すると、コンビニのおにぎりやサンドイッチで済ませる子や、沖縄のファストフード店を試したいという子に分かれた。空腹状況というより、お小遣いの残りの金額に起因していたかもしれない(笑)。

18時半。那覇空港、四度目の手荷物検査場通過。すっかり要領を得ている子ども達。水筒や

ペットボトルをリュックから取り出し、搭乗券を片手にテキパキとすいているゲートを選んで進んでいく。すっかり慣れたもの。みんなの「帰りたくない」気持ちとは裏腹に、何もかも順調に鹿児島と家族のもとへ私たちは見えないものに導かれながら向かっていった。

鹿児島へ向かう最後の機内では「帰りたくない!」「帰りたくない!」の連発。「なんでこの飛行機のチケット予約したの?」とスタッフに八つ当たりも(笑)。座席のテーブルを出してうつぶしてふてくされる中学生。「絶対来年また行こうね」「来年じゃないよ、360日後」「そっか、そう思えばすぐのような気がする。カウントダウン始めよう」「家族の顔思い出せない~!」と大騒ぎの小学生。もちろん、「とりあえず、一回は帰りたい」という子もいたが…(笑)。

飛行機を降りる直前、「最後の解散時に谷さんに歌った歌をみんなで合唱して解散しよう!」と大いに盛り上がったのだが、上級生が冷静に「たぶん、親の前だと歌いづらいな」「うん、やめとこう」ということになり、荷物のターンテーブルにいくまでの移動の間に歌って、楽しかった夢の1週間から現実に戻ったのだった。

完